



# 100人の被災者に 100人のボランティア



## ●被災地でのボランティア活動

### 大切な信頼関係

地震で被災したから被災者というだけで、災害にあわなければ普通の人間なんです。ボランティアとして、その人たちとずっと顔を合わせていくということは、普通の人間関係を築くのと同時に、信頼関係をどのようにつくるかなんです。阪神淡路大震災のとき、最初、父一人で神戸に入ったんですが、そのときはまだ、信頼されていなかったと言っていました。

その後、母と私が行って、はじめて「この人にはこういう家族がいるんだ。そして家族みんなに来てくれた」と。一人で行っていると「私はボランティアで来てます」というふうに見えちゃうんですね。「ボランティア」という壁があって、でもそこに家族が来ると、ボランティアという感じじゃなくなって、「ここで一緒に活動してくれている人」という感じになるんでしょうね。家族が見えないと、父の角田四郎っていう人物が見えてこないんですよ。

### 被災者にはいろいろな人がいる

母と私という、全く地震を知らない二人がポンと行ったのですが、女性は女性の悩みを聞いてくれる女性がほしかったし、子どもは子どもの悩みを打ち明けられる子どもがほしかったんですね。子どもには子どもなりのボランティア、高校生には高校生なりのボランティアというものがあります。

新潟中越地震のときは、福生市の主婦の方たちと一緒にでした。そうすると、向こうの主婦の方たちと理解し合え、話が盛り上がります。若い人たちだけだと、お母さん年代の人たちとは話が違うっていうのがありましたね。福

生のグループの中に、70歳代の方がいらしたんです。その方も、あちらのおばあちゃんたちと心を開いて、どんなところが大変かというような話を聞かれていました。100人の被災者がいれば、100人のボランティアが必要なんだろうなというふうに思います。

## ●個人活動の大切さ

ボランティアは、一人の人間として、行くべきなんです。個人活動家であるべきなんです。「ブルーシート」という、福生市で父がやっている個人ボランティア活動家集団があります。個人の意思で、個人で活動している人たちの集団です。個人が集まっているというだけで組織ではない。組織でボランティアをしようとする、たとえば、9時から5時まで作業をして帰ってきなさいというルールができてしまいます。調和を乱す人が出てくると、追い出せ、となってしまいます。

ブルーシートのモラルとしての掟が五つだけあります。<sup>おきて</sup>「何も求めず」「押し付けず」「期待せず」「あきらめず」「そっとそばに立つ」というものです。たとえば福祉ボランティアでも、これは同じなんですよ。車椅子の人がいて、ハンカチをぽろっと落とした。後ろからさっと拾って、手に持たせてあげる。それだけでいいんですよ。それがボランティアの始まりで、まずハンカチが落ちたことに気づいてあげるということ。そっとそばに立っていればわかるはずなんですよ。これが一番大切なんです。

ボランティアって、よく楽しくてやってるんだろうと言われるんです。それは5%もないと思いますね。何が続ける理由かという、人との出会いが一番大きいんです。